

日本学術振興会 日中韓フォーサイト事業
中間評価（令和4（2022）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 東京大学大気海洋研究所（大気海洋研究所・教授・渡部 雅浩）
研究交流課題名 北東アジアにおけるフューチャーアース推進のための気候変動研究共同拠点形成

評価結果（総合的評価）

- | | |
|---|--|
| S | 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。 |
| ○ | A 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。 |
| B | ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。 |
| C | 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

本研究交流課題は、アカデミア主導で北東アジア域のフューチャーアース（FE）を推進発展させることを長期目標とし、気候変動の物理学的メカニズムや予測及び、海洋陸域環境の物理化学生物学的変化を研究してきた専門家集団による、自律分散型の共同研究・研究交流拠点を形成することを目指しており、新型コロナウイルス感染症による影響もあったが、国際会議の3か国持ち回りによる定期的な開催や、データの共同利用といった研究交流など、概ね計画通りに進んでいる。また、単にワークショップやシンポジウム等で集まるだけでなく、韓国での全体会合の成果が、有力な国際誌（Bulletin of the American Meteorological Society）で発表されているなど、研究面においても実質的な形で成果を上げつつある。ただし、本課題で柱とされている4つのテーマについては、「2. 北東アジアの生態・社会に対する気候変化の影響」の部分がやや弱いと思われるため、今後、特に社会科学系の研究者の参画を期待する。

AOGS（アジアオセアニア地球物理学連合大会）でセッションを主催したり、日本と中国の拠点機関の間で包括研究交流協定が締結されるなど、拠点構築に向けた具体的な取り組みも見られる一方で、世界的水準の国際研究交流拠点を今後どのように形成し、発展させていくのか、学術的価値の高い成果をどのように効率よく生み出していくのかなどの計画についてやや不鮮明である。自律分散型のプログラムということではあるが、その中でも成果を上げていく具体的な計画や見込みが示されるとなおよい。また、日中に加えて日韓の交流協定も是非実現して欲しい。

若手研究者の育成については、中国、韓国での全体会合やセミナー、国際会議でのセッションに特に日本側から多くの若手研究者が参加しているほか、中国から留学生を受け入れたり、日本から若手研究者をソウル大学に特任研究員として派遣するなど、長期継続的に人の交流を行っている点は評価できる。大学や研究機関をお互いに訪問することは重要であり、工夫して今後も是非進めて欲しい。一方で、自発的な個人ベースでの研究交流が行われることを期待しているように感じられ、若手の育成や交流を促進する企画が見えづらい。今後、本プログラム内でどのように若手を育成していくのか、具体的なビジョンを明確にし、3か国でより広く深く継続的に若手研究者同士が交流できるような、本プログラムならではの企画を積極的に進める姿勢が期待される。

日本側研究者が主著者となった国際共著論文の発表や、現在執筆中というレビュー論文の早期公表など、事業期間の後半でより具体的な議論が進むことを期待したい。